

鉄斎

— 粉本に見る学びの跡 II —

[前期] 6月21日(火)～7月24日(日)

[後期] 9月1日(木)～9月25日(日)

夏期休館 / 7月25日(月)～8月31日(水)

10時～16時 月曜日休館 但し7月18日・9月19日は開館、翌日休館



59 [粉本] 牡丹花肖柏像



87 [本画] 隠士牡丹花肖柏像

「粉本」の語源は古く唐時代に遡り、元時代の夏文彦の『図繪宝鑑』には「古人の画稿、之を粉本と謂う」とあり、中国においては画稿を指す言葉であった。我が国においては絵師が後日の制作や研究、修学のために模写したものをいい、絵手本として尊重されてきた。

今日我々が「鉄斎の粉本」と呼称する模写類は、近代日本画壇に独自の地位を築いた富岡鉄斎（1836～1924）の学びの跡を知る貴重な資料である。特定の師を持たなかった鉄斎は、古人のすぐれた画を模写して筆法、技法、構図、彩色を学び、画格、筆意を吸収することに努めた。その対象は和漢のいずれの時代を問わず、分野では仏画、山水、人物、花鳥、風俗、絵図など多岐にわたり、様式では北宗画、南宗画、漢画、大和絵を網羅し、流派、筆者も極めて多彩である。絵画のみならず墨跡、建造物、彫刻、工芸品、道具類、歴史資料も写しとっていて、幅広い興味を知ることができる。現在確認されている最も若い作例は、年紀から19歳の筆になることがわかる《雉子図》(No.15)と《劉玄德像》(No.76)で、《達磨像》(No.36)や《木食応其上人像》(No.67)などの80歳代後半の作にいたるまで、おおよそ70年にわたる学びの跡を辿ることができる。

多彩を極める鉄斎の粉本のうち、今回は和歌、連歌、俳諧に関係する資料に焦点をあてることにする。文芸にまつわる人物や資料は鉄斎の研究対象であり好画題であった。

鉄斎と和歌 代々石門心学を家学とする京都の商家に生まれた鉄斎は、6歳の頃より山本蒨園に漢文の素読を習いはじめ、長じて漢学を岩垣月洲、後に陽明学を春日潜庵、詩文を叡山の僧羅溪慈本に学んだ。生涯「儒生」という信念を抱き学問の道に進んだ鉄斎の研究対象は、漢学のみならず国学にもおよんでいる。国学の素養は15歳の頃に野之口隆正に学んだことに培われ、古事記、日本書紀、万葉集などの古典研究をするうちおのずと和歌の世界にも眼を開かれていった。

こうした学問とは別に実質的に和歌に親しむようになったのは、幕末の歌人として名高い大田垣蓮月（1791～1875）の影響によるところが大きいと考えられる。鉄斎は二十歳の頃、父の命により学僕として蓮月と同居をしている。身のまわりの世話にはじまり、陶器作りを生活とする尼のために、陶土を搬入し出来上がった急須や茶碗などを粟田の窯元に運んでいた。共に過ごすなかで、蓮月が短冊や色紙に細く流麗な筆跡で和歌を書きつける姿を近しく目にしたであろう。父が逝去すると鉄斎は独立するも生活は苦しく、蓮月は和歌の揮毫を依頼されるとそれに添える画を描かせて、身が立つように心を配っていた。蓮月が鉄斎の行く末をたのもしげに深い愛情をもって見守っていたことは、遺された歌から窺いしれる。文久元年頃の長崎遊学に際しては「もろこしの月のかつらの一本もをりもてかへれわが家づとに」、また明治7年に敢行された北海道旅行の折には「君のゆくえぞのちしまのあら波もをりしづまりてまちわたるらん」の歌を贈っている。

明治8年12月に蓮月は永眠するが、和歌の精神は鉄斎はもとより富岡家の女性たちに受け継がれた。鉄斎の妻春子は、愛媛伊予の武家に生まれ、娘時代には京都の五条家に公家奉公をして雅の世界に接した。26歳で鉄斎と結婚してからは姑に孝行を尽くし、学者を志す夫に仕え子育てに励みながらも、蓮月に和歌や陶器を学んでいたという。春子は毎年、勅題和歌を詠進することを励みとしており、これに合わせて鉄斎も歌を詠み、勅題画の制作を楽しんでいた。また鉄斎の孫で歌人の富岡冬野（1904～1940）は、和歌を佐佐木信綱に学んでおり、息謙蔵の妻としも竹柏会に所属していた。

さて鉄斎の漢詩文については中国文学者の入矢義高が、巧拙は別としていわゆる和習（和臭）がほとんど見られず、作風は端正な姿勢を崩すことなく修辞法にも細やかな気配りをしていると評している。鉄斎は晩年、自作の詩文の添削を親子ほどの年齢差がある長尾雨山（1864～1942）に依頼していた。漢詩文に秀で渡中経験がある雨山に尊崇の念をもち、教を乞うことを厭わなかった。

一方和歌については、正宗得三郎が目に触れた範囲を「和歌集」としてあげるのが唯一で、作風の言及にまではいっていない。ただ鉄斎は折々に歌を詠むことを楽しみとし、大正6年に帝室技芸員の辞令を受けとった時には「蝙蝠が門違ひに入来り祝いの客は市をなすかな」の戯歌一首を詠んでいる。また画題によっては自作の和歌を賛に寄せており、門司の和布刈神社が所蔵する若布刈神事の図に拠って描いた《文字市若布刈神事図》(No.88)には「吹風に硯の海に浪荒てあしでになびく筆の跡かな」、九十落款のある《昇天龍図》(No.91)には「一筆に硯の海を飛出て雲るにのぼるたつぞあやしき」と書き添えている。

資料を写し実像に迫る 「万卷の書を読み万里の路を行く」ことを生涯座右に掲げ、鉄斎は日本各地の名所旧蹟、歌枕を訪ね歩いて見識を深めた。明治22年2月には、高知土佐で「続日本紀」に記述のある高鴨神を祀る一宮村の高鴨神社（土佐神社）に参拝し、国府址に紀貫之の旧蹟を探索している。その折、高鴨神社の社務所で神社所蔵の絵図を摸したものが《土佐古府蹟之図》(No.43)である。そして翌年4月には、長男謙蔵を伴って東京から信州を旅した。帰路、「伊勢物語」で有名な宇津山蔦の細道を越えて静岡に宿泊し、その道中で描いたのが《古宇津の山道図巻》(No.18)である。

鉄斎はこうした名所旧蹟を探訪すると同時に、ゆかりの人物の検証にも精魂を傾けた。旅に生きた俳人松尾芭蕉(1644~94)にはとりわけ強い共感を覚えていたようで、伊賀上野の蓑虫庵や清水鉄舟寺の芭蕉句碑を訪れてその足跡を辿っている。俳聖と仰がれた芭蕉の肖像は、門人あるいは私淑する人々たちによって数多く制作されていて、鉄斎はそのうち目にしたものを努めて摸写し(No.61、62、63)、資料の蒐集もなしている。愛蔵の《芭蕉桃青乗馬像・行旅旅拓本》(No.83)は、天明5年に俳僧蝶夢が芭蕉の墓所である近江の義仲寺に納めたもので、鉄斎が手中に収めた頃にはすでに原画の所在もわからず拓本の板木も失われていて、珍重すべきものであったようだ。

この拓本を絵手本として鉄斎は芭蕉像を描いている。《蕉翁乗馬図》(No.84)は、原画筆者が門人伊賀百歳であることが刻される《芭蕉桃青乗馬像拓本》(No.83-1)に拠るもので、大和絵風の美しい作品である。画面上部に色鮮やかな色紙形を配し、『芭蕉翁絵詞伝』巻中から節略した一文と拓本の短冊にある「野をよこに馬ひきむけよほととぎす」の句を引いている。馬で行く芭蕉の後を童二人が追い慕う景は、同書の挿図をとり入れながら、芭蕉像は拓本の図様を尊重している。また《芭蕉行脚像》(柿衛文庫蔵)は、蚊足の原画になり山口素堂が俳句を寄せる《芭蕉桃青乗馬像拓本》(No.83-2)に拠った作である。鉄斎は自身の作品の軸裏に、拓本の原画筆者は芭蕉の容貌を熟知している門人であるので確固たる肖像であると識している。生前を知る者たちによって描かれた肖似性の高い図を典拠することで、芭蕉の実像を描きだそうとしたのだろう。

同様のことは、《隠士牡丹花 肖 柏像》(No.87)においてもいえる。連歌師牡丹花 肖 柏(1443~1527)は摂津池田氏の庇護のもと、長年池田に過ごした。大広寺の泉福院内に「夢庵」と称する草庵を結んで周囲に四季の草花を植え、「弄花軒」なる書齋で香を聞き酒をたしなみ花を愛でる生活をおくった。肖柏の生前の相貌をもっともよく写していると考えられているのは、没後3月ほどで描かれた常庵 龍 崇の賛がある東京国立博物館蔵の肖像である。脇息によりかかり遠方を眺める像は人麿像の影響下に成ったもので、《十二番連歌 合 絵》(No.28)の肖柏像もその流れをくむものである。しかし鉄斎が《隠士牡丹花 肖 柏像》で用いたのは類型化された図様ではなく、長く肖柏が過ごした大広寺に伝蔵される木像であった。かつて鉄斎は大広寺に赴いた折にこの木像を実見し摸写(No.59)しており、池田の地における肖柏の風雅を題材にする図には、大広寺像がふさわしいと考えたのであろう。なお草庵の様子は歌集にある記述から創造したという。

鉄斎の史蹟や日本の韻文学に功績を遺した人物たち寄せる強い関心は、国学者としての側面を顕著に現すものであろう。実像を伝えうる根拠のある資料を探しもとめ、考証を重ねた結果が作品となって創出されたのである。鉄斎の粉本には美術や文芸の分野だけではなく、儒学、仏教、道教、神道、歴史、有職故実、地誌等への広範にわたる知見が示されていて、資料として今後各分野に活かされることを期すものである。(柏木知子)

〔参考文献〕

正宗得三郎『鉄斎』(平凡社 1961) / 入矢義高『鉄斎の詩文』(『別冊墨』第10号「富岡鉄斎 人と書」芸術新聞社 1989) / 松原茂『画家・文人たちの肖像』(『日本の美術』386号 至文堂 1998) / 展覧会図録『池田氏と牡丹花 肖 柏』(池田市立歴史民俗資料館 2006) / 展覧会図録『芭蕉—新しめは俳諧の花』(柿衛文庫 2009)



84 蕉翁乗馬図



83-1 芭蕉桃青乗馬像拓本

《出品目録》

[粉本]

番号	名 称	原画筆者等	制 作 年	年 齢	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	形 状	
1	芦の丸屋図	南涯			51.3×59.3	紙本 淡彩	掛 幅	
2	在原業平像				26.0×38.0	紙本 着色	掛 幅	
※ 3	赤穂義士画像	寺田孝忠	明治15	1882	47	各70.3×65.8	紙本 淡彩	対 幅
4	伊勢山室神社境内図 平田篤胤墳墓図	(右幅：喜多村豊景筆)			31.8×43.8 33.8×43.8	紙本 淡彩 紙本 墨画	対 幅	
5	上田秋成像 秋成稿本合装	甲賀文麗一柳雪			60代	141.2×33.0	紙本 淡彩	掛 幅
6	牛祭図	浮田一薫			103.0×35.2	紙本 着色	掛 幅	
※ 7	大伴旅人愛酒図	田中訥言			40.0×57.0	紙本 着色	掛 幅	
※ 8	小川可進像	武沢楊岸			64.7×34.0	紙本 淡彩	掛 幅	
9	大伴家持古跡見取図 拓本合装				196.4×32.7	紙本 墨画・拓本	掛 幅	
10	尾張画陽謝庵詠花俗訓	丹羽嘉言	明治27	1894	59	21.0×300.6	紙本 墨画	卷 子
11	柿本人麻呂像	藤原信実			88.0×38.0	紙本 淡彩	掛 幅	
12	歌仙図				各30.5×25.0	紙本 淡彩	台紙貼	
※ 13	関雲長像	馬元欽			77.2×53.5	紙本 淡彩	掛 幅	
14	砧図	田能村竹田			38.2×26.7	紙本 淡彩	掛 幅	
15	雉子図		安政 1	1854	19	95.2×30.7	紙本 着色	掛 幅
16	木下長嘯子像				37.3×27.3	紙本 墨画	台紙貼	
17	京極宗輔図	田中訥言			108.3×25.9	紙本 着色	掛 幅	
18	古宇津の山道図巻		明治23	1890	55	28.4×196.3	紙本 墨画	卷 子
※ 19	黄梁一炊図	渡辺峯山			158.0×72.5	紙本 淡彩	掛 幅	
※ 20	五祖荷鋤図	牧谿			66.0×31.0	紙本 墨画	掛 幅	
※ 21	小堀遠州像	松花堂昭乗			75.3×29.5	紙本 淡彩	掛 幅	
22	小むらさき像	宮川長春			79.0×30.9	紙本 淡彩	掛 幅	
23	佐川田壺斎幽居図				47.0×63.6	紙本 淡彩	掛 幅	
24	似雲法師自画像	似雲			80代	122.0×43.4	紙本 着色	掛 幅
※ 25	芝仙祝寿図	渡辺峯山			110.0×33.6	紙本 淡彩	掛 幅	
26	詩仙堂略図				28.0×64.0	紙本 墨画	掛 幅	
27	謝庵逸事巻	西村清狂一丹羽嘉言	明治27	1894	59	32.2×387.4	紙本 淡彩	卷 子
28	十二番連歌合絵				40代	29.4×334.6	紙本 淡彩	卷 子
※ 29	秋景山水図	范寛一汪葑			190.5×106.3	紙本 淡彩	掛 幅	
30	職人尽歌合絵師図	《鶴岡放生会職人歌合》のうち			26.0×38.0	紙本 淡彩	掛 幅	
31	職人尽歌合筆生図				27.0×37.8	紙本 墨画	台紙貼	
※ 32	千利休像	長谷川等伯			98.3×48.5	紙本 淡彩	掛 幅	
☆ 33	大黒天像	小田海僊			70.7×49.0	紙本 淡彩	掛 幅	
※ 34	平重盛像	伝藤原隆信			136.0×112.0	紙本 淡彩	掛 幅	
※ 35	醍醐天皇像	京都 醍醐寺本			112.8×53.0	紙本 淡彩	掛 幅	
※ 36	達磨像	顔輝	大正 9	1920	85	81.3×66.7	紙本 着色	掛 幅
37	大雅逸事巻		明治28	1895	60	28.0×985.0	紙本 着色・墨画	卷 子
※ 38	竹虫図	趙昌			112.5×54.8	紙本 淡彩	掛 幅	
39	角大師像考				28.0×286.5	紙本 墨書	卷 子	
※ 40	手島堵庵像	京都 明倫舎本			65.2×50.0	紙本 着色	掛 幅	
※ 41	天池石壁図	黄大癡			132.0×53.3	紙本 淡彩	掛 幅	
42	遠山衲衣略図		明治41	1908	73	54.6×92.0	紙本 淡彩	掛 幅
43	土佐古府蹟之図		明治22	1889	54	56.8×89.8	紙本 淡彩	掛 幅
※ 44	豊臣秀吉像	アサカサンフランシスコアジア美術館本	明治40	1907	72	49.9×37.2	紙本 淡彩	掛 幅
※ 45	陶淵明像	中山高陽			40.0×53.2	紙本 淡彩	掛 幅	
46	中井履軒像				79.0×30.0	紙本 淡彩	掛 幅	
47	能因法師像				56.1×59.1	紙本 墨画	掛 幅	
※ 48	叭々鳥図	沈南蘋			78.2×55.0	紙本 着色	掛 幅	
☆ 49	番匠図	三熊忠孝〔東北院職人歌合〕所載			26.9×38.2	紙本 墨画	掛 幅	
50	雛屋立圍像	野々口生白			43.6×28.0	紙本 墨画	台紙貼	

	51	誹謗之図	小田海儂						35.5×69.2	紙本	墨画	掛	幅
※	52	深井志道軒像 志道軒書合装	谷文晁						72.5×54.0	紙本	墨画	掛	幅
	53	武陵桃源図	董其昌						164.0×64.0	紙本	着色	掛	幅
	54	藤原行成像							92.0×44.0	紙本	着色	掛	幅
※	55	藤原惺窩市原村幽居図	狩野山雪						106.0×28.4	紙本	淡彩	掛	幅
	56	平城宮趾之図	北浦定政・斎藤拙堂賛						134.0×85.0	紙本	着色	掛	幅
※	57	糸瓜群虫図	伊藤若冲			60代			121.0×51.5	紙本	淡彩	掛	幅
※	58	本因坊日海像	京都 寂光寺本	明治22	1889	54			47.7×20.4	紙本	淡彩	掛	幅
※☆	59	牡丹花肖柏像	大阪 大広寺像						43.9×33.3	紙本	淡彩	掛	幅
☆	60	鳳鳴朝陽図下絵		大正5頃	1916頃	81頃			76.2×40.6	紙本	墨画	掛	幅
	61	松尾芭蕉像	杉山杉風						28.0×39.0	紙本	淡彩	掛	幅
	62	松尾芭蕉像・千利休像							26.9×37.3	紙本	墨画	台紙貼	
	63	松尾芭蕉図							77.5×27.3	紙本	淡彩	掛	幅
※	64	紫式部石山寺図	池大雅	明治29	1896	61			106.7×39.3	紙本	着色	掛	幅
※	65	名花十友図	椿椿山						131.5×73.1	紙本	着色	対	幅
※	66	鳴鶴図	文正					各	148.2×90.2	紙本	着色	対	幅
※	67	木食応其上人像	和歌山 金剛峯寺本	大正11	1922	87			79.0×48.5	紙本	淡彩	掛	幅
	68	摸古卷							48.6×607.5	紙本	着色	卷	子
	69	山部赤人像	藤原信実			40代			88.5×36.3	絹本	着色	掛	幅
	70	夕顔絵茶壺下絵		大正12	1923	88			64.0×59.0	紙本	墨画	掛	幅
※☆	71	養老瀑図	高久隆古						131.5×42.5	紙本	淡彩	掛	幅
※	72	与謝蕪村像 蕪村句短冊合装	呉春						62.8×20.4	紙本	淡彩	掛	幅
	73	吉田兼好像	土佐光成						87.6×34.6	紙本	墨画	掛	幅
※	74	頼山陽像	義亮						37.7×31.6	紙本	淡彩	掛	幅
	75	旅館夜筆巻		明治38	1905	70			11.3×579.0	紙本墨書・墨画	巻	子	
	76	劉玄德像		安政1	1854	19			79.6×27.0	紙本	墨画	掛	幅
※☆	77	龍図	伊藤若冲						118.4×27.9	紙本	墨画	掛	幅
※	78	老槐墨戯図 板倉槐堂書簡合装	板倉槐堂	明治9	1876	41			62.2×48.7	紙本	墨画	掛	幅
※	79	六祖像	土佐光起—田中訥言	明治24	1891	56			72.2×27.4	紙本	淡彩	掛	幅
※	80	渡辺華山像	椿椿山						38.8×26.8	紙本	淡彩	掛	幅

[参考資料]

番号	名 称	筆 者	制 作 年	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	形 状	備 考
☆	81	若布刈神事図	大正5	1916	55.7×47.6	紙本 墨画	掛 幅 鉄斎覚書
※	82	藤原惺窩市原村幽居図	原画：狩野山雪 摸写：島南谷	明治15	1882	136.3×31.5	紙本 淡彩 掛 幅 鉄斎覚書
☆	83	芭蕉桃青乗馬像拓本 芭蕉桃青行旅像拓本	伊賀百歳筆 蝶夢摸刻 蚊足筆 蝶夢摸刻	天明5	1785	82.6×28.6 88.0×31.2	紙本 墨拓 対 幅 鉄斎箱書

※は原画を写真パネルにして展示、☆は本画を併せて展示。

[本画]

番号	名 称	制 作 年	年 齢	本 紙 寸 法	材 質・彩 色	形 状
84	蕉翁乗馬図		50代	127.6×50.5	絹本 着色	掛 幅
85	職人尽番匠図		50代	109.0×37.8	絹本 着色	掛 幅
86	養老瀑図		50代	106.0×37.0	絹本 着色	掛 幅
87	隠士牡丹花肖柏像	明治38	1905	70	127.6×49.8	絹本 着色 掛 幅
88	文字市若布刈神事図	大正5	1916	81	100.0×45.1	紙本 淡彩 掛 幅
89	鳳鳴朝陽図	大正5	1916	81	143.0×41.6	絹本 着色 掛 幅
90	大国大神神影	大正9	1920	85	127.6×43.7	紺紙 金泥 掛 幅
91	昇天龍図	大正13	1924	89	132.2×32.0	紙本 墨画 掛 幅

[原画写真パネル] 番号は粉本リストを参照

番号	名 称	筆 者	所 蔵 者
3	義士四十七士図	寺田孝忠	京都 大石神社
7	大伴旅人愛酒図	田中訥言	兵庫 逸翁美術館
8	小川可進像	武沢楊岸	京都 小川後楽堂
13	関雲長像	馬元欽	東京 渋谷区立松濤美術館 (橋本コレクション)
19	黄梁一炊図	渡辺筆山	個人
20	五祖図 (狩野派模本唐画卷 卷第二十のうち)		東京国立博物館
21	小堀遠州像	松花堂昭乗	京都 孤篷庵
25	芝仙祝寿図	渡辺筆山	愛知 田原市博物館
29	秋景山水図	汪葑	京都市立芸術大学
32	千利休像	長谷川等伯	京都 不審菴
34	平重盛像	伝藤原隆信	京都 神護寺
35	醍醐天皇像		京都 醍醐寺
36	達磨像	顔輝	京都 広誠院
38	竹虫図	伝趙昌	東京国立博物館
40	手島堵庵像		京都 明倫舎
41	天池石壁図	黄大癡	大阪 藤田美術館
44	豊国明神像		アメリカ サンフランシスコ・アジア美術館
45	陶淵明像	中山高陽	個人
48	草花群禽図	沈南蘋	個人
53	武陵桃源図	董其昌	京都 六波羅蜜寺
55	藤原惺窩市原村幽居図	狩野山雪	東京 根津美術館
57	糸瓜群虫図	伊藤若冲	京都 細見美術館
58	本因坊日海像		京都 寂光寺
59	牡丹花肖柏木像		大阪 大広寺
65	名花十友図	椿椿山	個人
66	鳴鶴図	文正	京都 相国寺
67	木食応其上人像		和歌山 金剛峯寺
71	養老瀑図	高久隆古	兵庫 瀬川美術館
72	蕪村画像	呉春	個人
74	頼山陽像	義亮	京都 頼山陽旧跡保存会
77	龍図	伊藤若冲	京都 大光明寺
79	六祖大師三幅対	田中訥言	京都 三秀院
80	渡辺筆山像	椿椿山	愛知 田原市博物館

・出品作品は期間中下記の通り2回にわけて展示いたします。但し一部作品は重複することがあります。

前期 6月21日(火)～7月24日(日) 後期 9月1日(木)～9月25日(日)

※夏期休館 7月25日(月)～8月31日(水)

・下記の日程で学芸員による展示解説会を行います。

7月2日・16日、9月3日・17日 午後1時30分より

・今回の展覧会に際して下記の方々にご協力を賜りました。記して感謝いたします。(敬称略、五十音順)

個人のご芳名は控えさせていただきました。

池田市立歴史民俗資料館 大広寺 大光明寺 相国寺承天閣美術館 根津美術館

個人蔵 No.17

・次回展覧会 「鉄斎 ー多彩な画題・多様な画風IVー」

会期 10月4日(火)～12月11日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地
TEL (0797) 84-9600
FAX (0797) 84-6699
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>